木村定三コレクションの日本陶磁

仲野　泰裕

はじめに

日本陶磁として調査対象とした資料はおおむね五百点に及ぶ。結果、外国陶磁とするのがふさわしいと判断したもの、人形など土製であっても焼成されていないものは除いた。そして、歴史資料として江戸時代末期までのものと明治時代以降現代までとで二分し、本号では、前者を中心にまとめたものである。また木村定三コレクション（以下コレクションと言う）には、沖縄、中部、北陸、北海道などの地域の資料が認められないことから、古代中世に続く近世については、九州、中国・四国、近畿、東海、関東以北に地域区分した。

木村定三コレクションにおける日本陶磁の特徴

時代的傾向

原始時代から江戸時代末期までを鳥瞰すると、桃山時代以降がその大半であり、特に縄文時代、弥生時代は皆無である。また古瀬戸など中世陶器の少ない事もこのコレクションの特徴と言える。これは、中国陶磁と共通する点でもあるが、茶の湯に使える器という視点が収集の大きなポイントとなっていたと考えられる。

地域的な概要

古代中世に続く近世では地域・内容が多岐にわたる。西から順に唐津・有田を核とする九州諸窯、萩、備前、源内焼などの中国・四国諸窯、長次郎、仁清などを始めとする関西諸窯、さらには志野、織部を核とする美濃諸窯と、春岱、民吉などの瀬戸諸窯や名古屋城下のやきものを含む東海諸窯などがある。さらに、江戸の隅田川焼、相馬駒焼など関東以北に及ぶ地域を含んでいる。

古代・中世　橘寺出土と考えられる方形三尊塼仏（M1016、目録１）に始まり平安時代の小瓶（M2928、目録２）、同後期に始まる末法思想に関連して造営された経塚に埋納された経筒を収めた経筒外容器（M994、目録６）や瓦経（M985、目録７）、さらに降って山茶碗（M818、目録８）などがある。さらに、産地等が充分特定できないが、猿面硯（M2356・M2355、目録３・４）には、須恵器や瓦の一部が利用されており興味深い資料である。

九州地方では、肥前の唐津と有田を核として、上野・高取・八代・小代・薩摩などが収集されている。

唐津では、茶碗が多く含まれているが、鉄絵草文沓茶碗（M1452、目録12）や瀬戸唐津と

言われる灰釉茶碗（M803、目録21）など、十六世紀末から十七世紀初期に集中しており、鉄絵沢瀉千鳥文向付（M1472、目録15、他）や鉄絵草文壺（M1392、目録19）などが加わっている。さらに、上野の藁灰釉沓茶碗（M564、目録47）、八代と考えられる象嵌鳥文耳付水指（M1204、目録51）、薩摩の白薩摩銀杏文巾筒（M1583、目録53）などが、茶陶の厚みを増している。

有田では、初期の色絵磁器である色絵樹鳥文八角皿（M1458、目録24）を始めとして色絵梅椿文輪花鉢（M1355、目録27）などの他、海外向けでもある色絵花亀甲文角瓶（M1624、目録30）など多岐にわたっている。さらに波佐見など、くらわんかと通称される染付雪輪梅文碗（M800、目録39）や、繊細な造形美をみせる三川内の白磁栗置物（M1669、目録42）が含まれている。

中国・四国地方では、萩、備前共に茶器中心の収集である。萩では、灰釉割高台茶碗（M578、目録57）始め茶碗６点と、水指として使用された象嵌花文俵形鉢（M1186、目録60）などである。備前では、茶器（銘 著露軒（チョロケン）、M1419、目録63）の他、水指と花器がそれぞれ複数点含まれ、茶会にも使用されている。薄作りの素地に、塗り土を施し暗い茶褐色の色調となる伊部手と呼称されるものが多い。備前と丹波には工人の交流が知られ、胎土の比較検討など類似資料には注意が必要である。この他、源内焼の緑釉日本地図角鉢（M2374、目録74）が異彩を放っている。

近畿地方の作品には、楽家初代長次郎作とされる黒楽茶碗（M820、目録77）を始めとし三代道入、四代一入、十代了入など、楽家歴代の作品を掲げることができる。さらに表千家覚々斎が手造りした赤楽つぼつぼ絵茶碗（M594、目録83）始め「流芳五十」の内二点、さらに千家中興の祖如心斎天然宗左（七世を継ぐ）自作三点、如心斎の門人である江戸千家の祖川上不白作赤楽注連縄に海老絵茶碗（M805、目録211）、名古屋松尾流中興の祖五代不俊斎宗五作赤楽茶碗（M779、目録205）など、茶人の自作の茶器が多い事と、江戸千家、名古屋松尾流などの節目となる茶人の作品が収集されていることもコレクションの特徴の一つである。京焼のなかでは、野々村仁清の白釉鍬形掛花入（M1274、目録89）は加賀藩本多家に伝来したものとされるもので、長次郎作黒楽茶碗と共にコレクションを代表する作品の一つである。また江戸時代後期になる青木木米や永楽保全の作品が有る。中でも木米による南蛮写急須（目録95・96）や揚名合利印のある白泥三峰炉（M1563、目録98）などは著名であり、コレクション図録『文人趣味と煎茶　木村定三コレクション』（2018）で紹介したところである。また、永楽保全は、各地から招かれており、唐津写茶碗（M1144、近江・湖南窯、目録104）など、その足跡をたどる事の出来る作品が含まれている。一方、酒器を中心に手捏成形され、和歌が彫り込まれた大田垣蓮月（1791-1875、目録110～122）の作品群も異彩を放っている。

信楽焼にも三足を伴う矢筈口水指（M1200、目録134）など意欲的な作品の他、肩衝茶入（M1418、目録130）、手付花入（M1267、目録135）など名品が知られる。

東海地方では、桃山時代から江戸時代前期を中心として美濃窯の作品が集中しており、

志野茶碗(M792、目録144)、美濃伊賀双耳水指(M1187、目録159)、黒織部茶碗(M546、目録151、他)などがある。器種別の傾向は、志野蒲公英四方文向付(M1330、目録162)を始めとする各種の志野向付の比重が高い。さらに織部を含め、織部平向付(M1478、目録163、他)や志野織部手鉢(M1337、目録166)など多様性を見せている。はっきりと美濃製とは異なると判断できる作品として鉄釉肩衝茶入(銘 八重垣、M1416、目録172)を除くと、瀬戸関連資料は江戸時代後期に集中している。それらはさらに生業としての陶磁と、趣味的な要素の強い陶磁とに大きく分かれる。前者には、加藤春宇、加藤春岱、加藤春山、加藤民吉、川本半助などの作品が知られる。瀬戸染付磁器の内、明末の青花を厳格に写すなど優品を残している川本治兵衛(壕僊堂)の作品が認められない他、常滑で焼かれた作品も含まれていない。後者には、尾張藩御庭焼関連作品やそれらに御小納戸役として関与した藩士平澤九朗、正木惣三郎などの作品が認められる。

関東以北の作品は少なく、江戸千家の祖とされる川上不白による赤楽注連縄に海老絵茶碗(M805、目録211)の他、隅田川焼、相馬駒焼、相良人形などがある。

茶会記にみる嗜好[1]

木村定三は、昭和四八年(一九七三)三月四日を皮切りに、十回に及ぶ茶会を開いており、その都度茶会記が残されており、その大要を知る事ができる。第一回では「利休流無作法茶会」と称し、その招待状には「利休当初の茶道に還りあくまでも厳しさに徹し乍ら皮肉とユーモアに富んで固苦しさのない気楽な茶会」であると説明されている。具体的には、玄関に加藤孝一作テラコッタ(フレンチカンカン、M749、図１)や、こけし(M1613)を展示し、寄付の煙草にピースとホープ、灰皿として蓋(M1402、目録170)、蓋置として三脚付筒型トチ(M1429、目録169)とするなどの作品が選定されている。続く第二回「利休流無作法茶会」(同五十年・一九七五年五月五日)では、「原叟宗匠の命日は正確には６月25日ですが忌日を５月５日に変更させていただき、不肖私が原叟忌を兼ねて「子供の日茶会」別名「ディズニーランド茶会」を催したく思います。」とし、原叟手造赤楽富士茶碗(コレクション外)始め、軸・茶杓を含め五点を使用している。千家三大茶匠の一人とされる原叟への傾倒が偲ばれる。さらに、茶器の多くは、志野深向付(M1413、目録148、他)や色絵花文六角茶入(M1411、目録31)、茶器 銘 著露軒(チョロケン)(M1419、目録63)などが使われている他、この回では、コレクション以外の作品も多く認められる。また第九回「大鵬茶会」(平成七年・一九九五年四月二三日)では、阪神・淡路大震災を始めとする天災人災

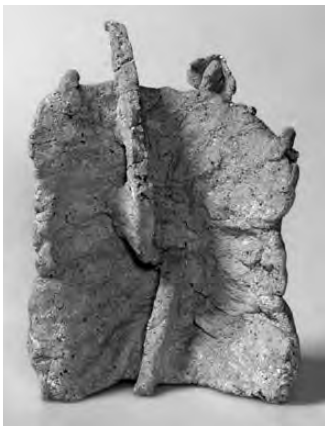

図１　加藤孝一《フレンチカンカン》M749

1　池田素子編「茶会記録」『木村定三コレクション研究報告書２』愛知県美術館、2007年。

が頻発する世情を憂い「大鵬一挙九万里」(原叟書、M2068)とされる壮大な世界観に基づき、大盤石な心構えが必要とし、「鵬」と名の付く作品をことごとく集めている。寄付に志野茶碗(守一銘 鵬、M792、目録144)が使われている。

これらの他、第四回「天下太平群仙遊楽会」(昭和五七年・一九八二年五月五日)では古山子(小山冨士夫)、第九回「大鵬茶会」では今井康人、岩田安弘、第十回「東海道膝栗毛　富士遠望船中遊楽茶会」(同九年・一九九七年五月五日)では古山子(小山冨士夫、粉引・種子島)、上田恒次(練上・白磁)、今井康人(伊賀)、岩田安弘(耀彩)、それぞれ制作の十点を超える茶碗を同時に使用している。好みの作家の作品を意欲的に使い育てる、木村定三らしさであろうか。

おわりに

コレクションの歴史的な構成は、古くは薄く、近世初頭に厚くなっている。地域性を含めて体系的な収集とは言えず、むしろ茶席、茶懐石で使えるものという視点が強く認められる。一方で、唐津・上野・萩の茶碗は十点に及ぶものの、実際に茶会に登場したものは少なく、木村定三の感性に基づき見立てる愉しさが重視されているように感じられる。また煎茶についても、同様の価値観からの収集が進められ、青木木米作の涼炉や急須などがコレクションの核になっているが、茶会を催すほどには至らなかった。